

43167
教科書文庫

4
8/0
32-1905
25000 31523

Kodak Gray Scale

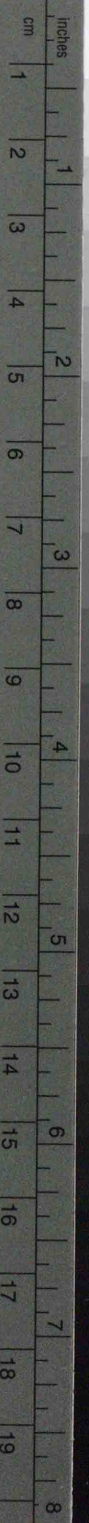
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省著作

高等小學讀本

五

發行所 教育圖書合資會社

T1A4
1F4
Mo31



文部省著作



高等小學讀本



發行所

教育圖書合資會社

五

登錄番号	31523
分	375.98
類	M

Faint handwritten text on the right page, including the characters '大日本帝國' (Great Japanese Empire) and '東京高等小學校' (Tokyo Higher Elementary School).

目録

第一課	氣のかはり易き男	一	第十一課	象狩の話	四十五
第二課	分業	四	第十二課	はわい出稼人の手紙	四十九
第三課	胃の説諭	九	第十三課	珊瑚	五十三
第四課	貨幣	十三	第十四課	にゅーとん	五十七
第五課	物の價	十八	第十五課	獅子	六十二
第六課	萬里の長城	二十四	第十六課	母の愛	六十六
第七課	鴻門の會(一)	二十七	第十七課	皮膚の養生	七十
第八課	鴻門の會(二)	三十二	第十八課	しゃぼん	七十三
第九課	諸葛孔明	三十八	第十九課	ウラジオストック	七十七
第十課	象	四十一	第二十課	ペてろ大帝	七十九

第一課 氣のかはり易き男。

世に愚なる男あり。

はじめは、そまになりたるが、

手にとる斧ノコギリが重しとて、

やめて、木挽キヒキとかはりけり。」

されども、日々に、大いなる

鋸持ノコギリつが苦しとて、

またも、木挽キヒキをうちすて、

今度は、大工となりにけり。」

大工は手斧テノコギリがあぶなしと、

恐れて、次は、屋根屋業。

屋根の高きに驚きて、

これもつづかず、つとまらず。」

次には、かほる、疊さし。

とこ厚しとて、これもやめ、

鍛冶屋になりてみたれども、

夏の暑さに困りたり。」

農夫となりて、田を作る、

その職業をはじめしに、

「こえ臭ければ、いや。」といふ。

さて、その次は何なるぞ。」

杵重ければ、米搗も、

少しの間にて見限りつ。

紙屑拾をはじめしが、

賤しきわざとて、廢しけり。」

あー。愚なるこの男。

今は、なすべきわざもなし。」

若き昔の怠を

悔いて、泣けども、いかにせん、

身は、はや老いて、手はきかず、

人の恵をたのみにて、

ちまたに叫び、門に乞ひ、

つなぐ命のあはれさよ。」

第二課 分業。

ま、ちはさゝいなものである。また、價もやすくて、一包、十二箇が、三錢ぐらゐで買はれる。しかし、もし、これを、一人で造るとしたら、どうであらうか。たとひ、休まず働いても、一日に、一包は造れまい。かりに、造れたとしても、それを、三錢ぐらゐで賣て、どのくらゐまうかるであらうか。まうかるどころか、非常な損になるのはきまてゐる。ま、ちの製造所に行つて見ると、職人が、おほぜいをして、それぞれ、手分をして、働いてゐる。すなはち、材木を器械にかけて、軸木（じくぎ）をこしらへるものもあり、軸木を、火で乾かすものもあり、乾かしたものの、先に、薬をつけるものもある。

る。また、さらに、それを、温室で乾かすものもあり、乾かしたのをそろへて、ま、ちの箱に入れるものもあり、箱に入れたのを、十二づつ集めて、紙に包むものもある。すべて、このよゝに、手分をして、別々の仕事をすることを分業といふ。

分業によつて、ま、ちをこしらへると、その出来がよければ、かりでなく、また、出来高が、たいそゝ多くて、一人一人、別々になつて造るときとは、とゞいて、比較にはならない。したがつて、一包、三錢ばかりで賣ても、そゝおゝにまうかるのである。

分業は、ま、ちの製造のみに限らず、多くの事業に、たいそ

一、利益のあるものである。いま、改めて、その利益をいってみると、大略、次の四つになる。

分業によれば、一人の人が、つねに、同じ仕事をくりかへすのであるから、早く、その仕事に熟練して、出来のよいものを、たくさん造ることができる。

また、分業によらず、一人で、種々の仕事を兼ねるときには、その仕事の移りかはりめごとに、居る場所をかへ、また、器具を取りかへなければならぬので、むだに、時間を費すことが多いが、分業によつて、それぞれ、一種の仕事にばかりかゝるときには、そんな手数がなくて、むだに、時間を費すことがない。

また、人は、その身體、才能などによつて、ある仕事には適し、ある仕事には適しないといふよゝなことがあるが、分業によると、じぶんに、も、とも適した仕事にばかりかゝることができぬ。

また、分業によつて、一つの仕事にばかりかゝるときには、しぜん、それに、精神をこらすことになるから、その仕事に適する器具の發明や改良をすることもある。

分業は、このよゝに、大きな利益のあるものであるが、ここに、注意しておかなければならないのは、分業によつて、する、それぞれの仕事は、全體の一部一部であるから、その、それぞれの仕事を、するものに、『共同』といふ考がなけ

れば、何のかひもない。」といふことである。たとへていへば、時計の各部分を、多人數で、別々に造つても、もし、めい／＼、隨意な形に造らうものなら、それを組み立て、一つの完全な時計に造りあげることとはできないのである。

また、大きくいへば、農夫の田畑を耕し、大工の家屋を造り、商人の物品を賣買し、官吏の政務を取扱ひ、教師の生徒を教育することなども、もとより分業で、それぞれの職業に従事するものが集つて、一つの社會といふものをつくるのである。しかし、もし、人々が、じぶんの利益ばかり考へて、すこしも、社會をつくるといふことに、心を向

けなかつたなら、ち／＼と、時計の各部分を造るものが、めい／＼、隨意な形のものをつくるのと、同じよ／＼な結果におちいらなければならぬのである。

第三課 胃の説諭

ある時、口が耳、目、鼻、手、足を集めて、相談會を開いた。口がいふには、

「諸君、今日、わざ／＼、こゝに、お集りを願つたのは、ほかのことでもありません。あの胃についての事です。胃は、われ／＼が、い／＼し／＼けんめいに働いて、食物を送つてやるのに、い／＼こゝ、手傳もせず、返礼もせず、ただ、ゐながら食つて、遊んでばかりゐます。われ／＼は、まったく、胃のた

めに、道具に使はれてゐるので。じつにつまらない
ではありませんか。以後、一同働くことをやめて、ひと
つ、あのおしーものをこらしてやらうではありませ
んか。」

といふと、一同は「さうだ。それがよい。それがよい。」と
いって賛成した。

そこで、足は、食堂に行くことをやめ、手は食物を口に持
ちこむことをやめ、鼻はこれを嗅ぐことをやめ、目はこ
れを見ることをやめ、耳は食事の報知を聞くことをや
めてしまった。

かうして、二三日たつと、からだじ。ーが、非常に衰弱して
きて、耳は鳴り、目は暗み、手足はなえて、動くことも、どう
することもできなくなてしまった。

そこで、口は、また、一同を集めて、「じつに、とんだことにな
りました。どうしたのでせう。」といつて、相談してゐると、そ
こへ、胃が来て、

「諸君は、じつに、しよーのない事をしました。諸君
は、諸君の送てくれた食物を、私が、ただ、ゐながら、食て、
遊んでゐたよーに思つてゐら、しるらしいが、それは大
きな誤解です。諸君が、からだの外部に居て、内部のこ
とを知らないことから起つた、大きな誤解です。私は、け、
して、遊んでゐたのではありません。私は、私で、諸君の

送てくれた食物を、いしーけんめいに消化して、粥かゆのよーなものにしてゐたのです。それが、さらに、腸で消化されて、乳のよーなものになり、血にまじって、からだじーをめぐたので、諸君も、たしに働くことができたのです。諸君は、私が諸君を、道具に使てゐたよーに思てゐら、しるらしいが、それなら、諸君も私や腸などを、道具に使てゐら、し。たといはなければなりません。しかし、からだは、その各部分が、それぞれ、職務を盡すので、保ていけるのでありますから、誰でも、そんな、かてなことを考へて、職務を怠るよーなことがあると、からだじーが衰弱しなければなりません。ごらんな

さい。諸君が、私をいぢめようと思て、食物を送らなかつたために、とーく、このとほり、からだじーが衰弱したては、ありませんか。

諸君も、し、そこに、お氣がつかれたなら、これから、すかり、心を改めて、めいく、その職務をお盡しなさい。それが諸君のため、また、からだのためです。」

と説諭した。耳、目、鼻、口、手、足はこれ聞いて、さては、さうか。とさとして、これから、いしーけんめいに、めいくの職務を盡した。それで、非常に衰弱してゐたからだも、だんだん回復してきたといふことである。

第四課 貨幣かへい

コノ世ノ、イマダ、大イニ開ケザリシ時代ニハ、人々ハ、ソ
 ノ、ミヅカラ用ヒテ、餘アル物品ヲモッテ、ソノ希望スル物
 品ト交換シテ、ワヅカニ、ソノ用ヲ辨ジタリキ。サレド、ソ
 ノ希望スル物品ト交換スルニアタリテ、種々ノ不都合
 起リタリシコトハ、ジツニ、想像スルニ餘アリ。
 タトヘバ、コ、ニ、漁夫アリテ、米ヲ得ント思ヒ、魚ヲ携ヘ
 テ、近隣ノ農夫ヲタヅネタリトセンニ、農夫、モシ、魚ヲ希
 望セズシテ、織物ヲ希望ストセバ、漁夫ハ、サラニ、織物ヲ
 有スル人ヲタヅネテ、マヅ、コレト交換シ、ソノ織物ヲ携
 ヘ、フタ、ビ、農夫ヲタヅネテ、米ト交換セザルベカラズ。
 サレド、不幸ニシテ、織物ヲ有スルモノヲタヅネエズバ、

漁夫ハ、マタ、サラニ、所々ニ奔走シテ、魚ヲ希望スル他ノ
 農夫ヲタヅヌルホカナカルベシ。カクノゴトキ困難、ア
 ニ、人ノタフルコトナランヤ。

サレバ、人智、ヤウヤク進ムニシタガヒテ、人ノ、イ、バンニ
 希望スル物品ヲモッテ、他ノ物品ト交換スルトキハ、人ノ、
 ヨーイニ受け取ルベキコトヲサトリ、ツビニ、カ、ル物
 品ヲモッテ、スベテ、物品ト物品トヲ交換スルトキノ媒介
 トスルニイタレリ。カ、ル物品ハ、スナハチ貨幣ナリ。
 サレド、貨幣トシタル物品ハ、昔ヨリ一定セルニハアラ
 ズシテ、アルヒハ、毛皮革ナドヲ用ヒタルコトアリ、アル
 ヒハ、牛、羊ナドノ家畜ヲ用ヒタルコトアリ、マタ、五穀、織

物ナドヲ用ヒ、象牙、貝殼ナドヲ用ヒタルコトモアリシガ、人智、マス、進ムニシタガヒテ、ツヒニ、イッパンニ、金、銀ヲ用フルニイダレリ。

ケダシ、金、銀ハ、毛皮、革、牛、羊、五穀ナドト違ヒテ、少量ニテモ、價、ハナハダカク、携帶スルニモ、保存スルニモ都合ヨク、マダ、分ツコトモ、合スルコトモヨクイニシテ、ソノタメニ、價値ヲ變ズルコトナク、產地異ナリトモ、成分ニ異同アルコトナキナド、貨幣トスルニ、モットモ便利ナルモノナレバナリ。

ワガ國ニテハ、金貨ヲモッテ、本位貨幣トシテ、イカニ多額ナル支拂ニモ、制限ナク通用スルコトヲ得ル定ナリ。サ

レド、金ハ、ソノ價、ハナハダカクシテ、價値スクナキ貨幣ヲ製スルニ適セザレバ、ワガ國ノ金貨ニハ、タダ、五圓、十圓、二十圓ノ三種アルノミナリ。シタガ、テ、少額ナル支拂ニ不便ナレバ、別ニ、五十錢、二十錢、十錢ノ銀貨、五錢ノ白銅貨、一錢ト五厘トノ青銅貨アリテ、銀貨ハ、一口ノ支拂ニ、十圓ヲ限り、白銅貨、青銅貨ハ、一圓ヲ限りテ通用スルコトヲ得、ソレヨリ上ノ支拂ニハ、受取人承諾スルニアラザレバ、通用スルコトヲ得ザル定ナリ。

貨幣ノ代用トナルモノニ、銀行券アリ。ソノ携帶ニ都合ヨキコトハ、ジツニ、貨幣ニマサレリ。ソモノ、銀行券ハ、タダ、一片ノ紙ニスギザルニ、人ノ、ケネンナク、コレヲ用

フルハ何故ゾ。コレ、銀行券ハ一種ノ約定證文ニシテ、コレヲ發行セル銀行ニ持チ行ケバ、タダチニ貨幣ト交換スルコトヲ得レバナリ。

ワガ國ノ銀行券ニハ、壹圓、五圓、拾圓、貳拾圓、五拾圓、百圓、貳百圓ノ七種アリテ、コレヲ發行スル所ハ日本銀行ナリ。

第五課 物の價。

物の價は、その物に効用あること、その物の、勞してはじめて得らるゝこと、によりて生ずるものなり。されば、大いに勞して得らるゝものなりとも、効用なきものは價あることなく、効用あるものなりとも、勞せずして

得らるゝものなれば、また、價あることなし。

たとへば、こゝに、一種の石あり。きはめてまれなるものにして、大いに勞して、はじめて得らるゝものなりとも、實用にも、裝飾にもならざるものなれば、これを買ふものなく、したがて、價あることなし。

また、日光、空氣のごときは、人の生命を保つに、必要にして、缺くべからざるものなれども、地球上に、あまねく存在して、すこしも勞せずして得らるゝものなれば、これを買ふ必要なく、したがて、また、價あることなし。水のごときも、またしかり。されど、水は、大都會などにては、時として、價を生ずることあり。これ、大都會などにては、おほ

むね、飲料水乏しくして、勞することなくて、得ることあたはざることあればなり。

次に、物の價は、主として、需要と供給との多少によりて定まるものなり。需要とは、買ふべき貨幣を有する人の、物を買はんとする希望をいひ、供給とは、人の賣らんとして持ち出したる物の分量をいふ。されば、乞食の絹布を得んとする希望は、これを買ふべき貨幣なくての願なれば、需要とはいひがたく、農夫の凶年に備へんがために貯蓄せる米は、賣らんとして持ち出したる米にあらざれば、供給には加はらざるなり。

さて、物の價は、供給の需要よりも少きときは、たかくなり、多きときは、やすくなるものなり。

たとへば、こゝに、賣家、一軒ありて、これを買はんとする人、五人あるときは、その五人は、おのゝ、その家の他人の手にわたらんことをおそれ、争ひて、たかき價をつくべし。かくて、その家は、もともたかき價をつけたる人の手にわたるべきなり。

また、これと反對に、同様なる賣家、五軒ありて、買はんとする人、ただ一人なるときは、賣家の持主、五人は、おのの、その家の賣れざらんことをおそれ、争ひて、その價をやすくすべし。かくて、もとも、價をやすくしたる人その家を賣ることをうべきなり。

物の價は、かくのごとく、需要供給の多少によりて、あるときは、非常にたかくなり、あるときは、非常にやすくなるものなれど、つひには、普通の價にもどるべきものなり。普通の價とは、物を製造するに費せる費用と、普通の利益とを合せたるものをいふ。

たとへば、靴を用ふること流行し來りて、買手にはかに増すときは、靴の價にはかに、たかくなりて、靴屋の利益、非常に多かるべし。かゝるときは、靴屋は、さらに、多くの職人を雇ひ入れて、さかんに、これを製造すべし。また、他人もその職業の利あるを見て、おのゝ、争ひて、これを製造すべし。かくするときは、靴の供給、しだいに増し來

りて、價は、やうやく、普通の價にもどるにいたるべし。また、これと反對に、價、しだいに、やすくなりて、普通の價よりも下るにいたるときは、しだいに、その製造高を減ずるがゆゑに、供給も、したがて減じて、價は、また、普通の價にもどるにいたるべし。すなはち、物の價は、普通の價をもとゝして上下すといふべし。

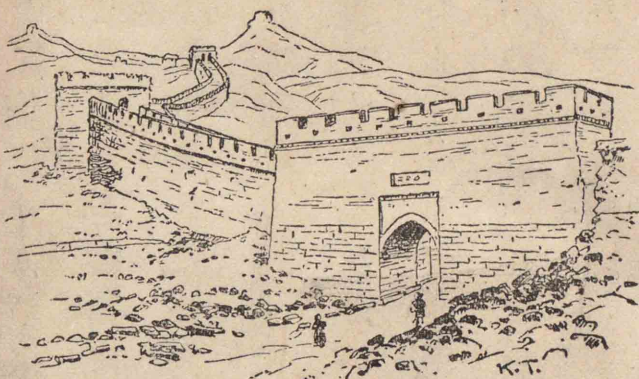
物の價は、かく、普通の價をもとゝして上下するものなれども、供給に限ある物、たとへば、名高き古人の書畫、古器物などのごときは、需要増すにしたがひて、その價、ますます、たかくなり、需要の減ずるにあらざるよりは、けして、そのやすくなることなきなり。すなはち、供給に限

あるものは普通の價なしといふべし。

第六課 萬里の長城。

萬里の長城は、支那の北部にあり。世界の奇觀として、上古の遺物として、その名、世に聞えたり。

長城は、東は、山海關よりおこり、西は、嘉峪關にいたりて盡く。その間、高き山を越え、深き谷をわたり、廣き野原を横切りて、長さ、じつに、七百餘里に及びり。その城壁の主なる所は、外部を、煉瓦、または、截石に



てたゞみ、内部を、土にてうづめたり。その高さは、およそ二丈五尺、厚さ一丈五尺。上は騎行することをうべし。六十間ごとに、方形の櫓あり。煉瓦にて造り、高さ、およそ五丈あり。城壁と櫓との上部には、凹凸の胸壁をまうけて、敵を射撃するに便せり。

そもく、支那には、今より二千數百年の昔、戦國の世にて、諸國の王、あひ争ひて、大いにさわがしき時代ありき。その頃、北方の野蠻人、内地の乱れたるに乗じて、しばしば侵入せしかば、諸國のうち、北方にある秦、趙、燕の三國は、おのく、國境に、長城を築きて、その侵入を防ぎたり。その後、秦の王は、つひに、諸國をあはせて、帝となり、みづ

から、始皇帝と稱したりしが、ながく、野蠻人の侵入する
うれへを絶たん」と思ひて、かの、秦、趙、燕の築きたる長城
を修繕し、なほ、あらたに増築して、いはゆる萬里の長城
を成功せり。しかして、これを成功するには、數十萬の人
夫を使役し、數年の年月を費したりといへば、その大工
事なりしこと、推して知るべし。今存するものは、この後、
多くの皇帝の、しばく、修繕、増築したるものなりとい
ふ。

長城は、かく、しばく、修繕、増築せられたりしかど、野蠻
人の勢は、非常に強く、かつ、内地の乱れたるに乗じて侵
入したりしかば、せ、かくの長城も、つねに、そのかひなか
りき。じつに、國家の安寧は、ただに、城の堅固なるのみに
よりて得らるゝにはあらずして、おもに、國民の一致、共
同する力によりて得らるゝものなることを知るべし。

第七課 鴻門の會 (一)

秦の始皇帝は、諸國をあはせて、とく、皇帝となつたほ
どの人であるが、萬里の長城を築いたり、立派な宮殿を
建てたりして、税を重くとりたて、また、法令をきびしく
して、人民の難儀を、すこしもかまはなかつたので、人民は、
たいそ、怨んでゐた。それで、始皇帝がなくなつて、二世皇
帝の時代になると、世は、ふたゝび乱れて、英雄が、諸方に
起つてきた。そのうちで、もとも、勢力のあつたのは、項羽と劉

邦との二人である。

項羽は勇武な男、劉邦は寛大な人。いづれも、楚の懷王の下についた。懷王は項羽と劉邦とに命じて、秦をうたしめた。そこで、項羽は范増といふけらいをつれ、劉邦は張良、樊噲といふけらいをつれて、それぞれ、秦の都へ向たが、項羽が黄河の北を攻めてゐる間に、劉邦は秦の都にうち入って、これをうち従へてしまった。

劉邦は、秦の人民を覇上といふ所に集めていふには、「われは、かつて、諸侯と、まづ、秦の都にはいたものがその地の王とならう。」といふ約束をした。すなはち、われは、これから、この地の王となるのだ。しかし、われは、けして、秦の

皇帝のよゝな暴政は行はない。ただ、なんぢらと、法律三箇條を約束する。『人を殺したものは殺す。人を傷つけたものは罪する。盗したものは、また罪する。』といふ三箇條を約束する。』といつて、秦の法令は、ことごとく廢してしまつた。秦の人民は、大いに喜んだ。

さて、項羽は、行く行く、土地を攻め従へ、秦の都にはいらうとして、函谷關といふ關所に来ると、劉邦の兵卒が、すでに、これを守つてゐるので、項羽は、大いに怒つて、たちまち、これをうち破つて、鴻門といふ所に進んだ。その時、范増のいふには、「劉邦は、すでに、都にはいて、しきりに、人民の機嫌をとつてゐるといふことです。きつと、皇帝になるつもり

でせう。早くうてしまひませんと、劉邦に先をこされてしまひます。」といった。項羽は、これに従つて、劉邦をうたりとした。

項羽のをちに、項伯といふものがある。張良とは、大のなかよしであつた。そこで、夜、そと、霸上の陣に行つて、張良を呼び出し、くはしく、そのことを告げて、「いしに逃げよう。」とすゝめた。けれども、張良は「危い時に、君を見捨てるのは不忠だ。私はわが君にこのことを告げなければならぬ。」といつて、陣にはいつて、劉邦に告げた。劉邦は「じぶんは、とても、項羽にはかなはない。」と思つてゐるので、大いに驚いて、さそく、項伯を呼び入れ、いろくともてなして、いふ

には「じぶんは、都にはいつてこのかた、まだ、何にも手をつけず、一々、官吏、人民をしらべ、寶庫を封じて、項羽殿の來られるのを待つてゐる。あの函谷關を守らせたのは、ただ、他の盜賊にそなへたまで、けつして、惡意のあつたわけではない。これから歸つて、項羽殿にこの事を話してもらひたい。」といつた。項伯はこれを承知して、「しかし、あした、鴻門に行つて、いちおし、項羽におあひになるがよい。」といつて、鴻門に歸つた。そして、項羽に劉邦のことばを話して、さて、いふには「劉邦は、大きなてがらを立てた人だ。てがらを立てた人をうつのは、はなはだよろしくない。いまに、劉邦が來たら、じぶんにもてなしてやるがよい。」といつて、い

ろいろと項羽をなだめた。

第八課 鴻門の會。(二)

あくる朝劉邦は張良、樊噲をつれて、鴻門に行った。そして、項羽にいふには、「私はあなたと力を合せて、秦を攻めました。あなたは、黄河の北で戦はれ、私は、黄河の南で戦ひました。しかし、私に、まづ、秦の都に攻め入ることができたのは、じぶんながら案外です。私に、悪意はありません。わるく思ってくださいな。」といふと、項羽も「あなたをうたうとしたのは、私の心から出たのではありません。」といひ、いろいろと、ちそーをして、劉邦をもてなした。

てゐた。劉邦は、北向に張良は、西向にすわてゐた。范増は、たびく、項羽にめくばせした。これは、劉邦を刺せといふのである。しかし、項羽は、なかく、應じない。そこで、范増は、そと出て、項莊といふものを呼んでいふには、「おまへは、これから、宴會の席に行つて、あいつをせよ。それがすんだら、劍舞をせよ。そして、劉邦を、一撃に撃ち殺せ。」といひ、そこで、項莊は、いひつけられたとほり、宴會の席に出つて、あいつをして、さていふには、「陣中のこと、音楽を奏するものもをりません。さぞ御退屈だらうとぞんじますから、ひとつ、私が劍舞をいたしませう。」といひ、劍を抜いて、たてました。すると、項伯も、たてまひ、そして、しじ

一劉邦をかばふよ一にするので、項莊は殺すをりがな
かった。



張良は主君の身の危いを見て、
にはかに座を立て、門外に居る樊
噲の所に行つて、このことを告げた。
樊噲は大いに怒つて、劍をおび、盾を
たばさんで、門内にはいた。そして、
宴會の席の幕をかゝげ、西向に立
て、項羽をにらみつけた。髪の毛は、
ま、すぐに立ち、めじりは裂けんば
かりである。項羽は劍のつかに手

をにかけて、みがまへして、「あれは何ものだ。張良、やはり、わ
が君、劉邦のけらいでございます。項羽、元氣な男だ。酒を
飲ませよ。」そこで、大きなさかづきで、酒を飲ませると、樊
噲は、一息に、これを飲みほした。項羽、肴に、豚の肉をやれ。
そこで、豚の肉をやると、樊噲は盾をふせ、これにその肉
を載せて、劍を抜いて、切つて食べた。項羽は樊噲に向つて、「い
かにも元氣な男だ。も、と飲まないか。樊噲、いくらでも飲
みます。しかし、まづ、あなたにお聞き申したいことがある。
あなたは、なぜ、わが君を殺さうとなさる。わが君は、第
一に、都に攻め入つて、大きなてがらをおたてになつた。それ
を、なぜ、殺さうとなさる。つまらんもの、言を信じて、て

がらのある人を殺さうとなさるのは、それは、秦の二のまひだ。きつと、あなたのためにはなりません。項羽は、だまて答へなかつた。

そのとき、劉邦は立て、かはやに行つた。樊噲も、張良もついで出た。そこで、劉邦は、張良に、白い璧二つと、玉の酒器二つとをわたして、これを項羽と范増とにやるよーにいひのこし、じぶんは樊噲をつれて、間道から、霸上の陣にはせ歸つた。

張良は劉邦が霸上の陣に着いたと思ふ頃、席に歸つて、項羽に向つて、「わが君は、酒をいただきすぎして、おいとまのあいさつをすることもできません。それで、私にいひつ

けて、白い璧二つをあなたに、玉の酒器二つを范増殿に奉らせませす。」といつて、それをさし出した。項羽「劉邦殿は、どこに行かれた。」張良「あなたのお機嫌の、まだなほらない様子を見て、逃げて行きました。たぶん、今頃は、霸上の陣に歸つてをりませう。」項羽は璧を受けて、そばに置いた。范増は酒器を受けて、下に置き、劍を抜いて打ちこはして、「あー。わが君は、とてもだめだ。皇帝となるものは、きつと劉邦だらう。われくは虜にされるだらう。」といつた。

劉邦は、この後、はたして、項羽を亡して、支那の皇帝となつた。後に、漢の高祖といはれるのは、この劉邦のことである。

第九課 諸葛孔明。

漢の後におこりたる世を後漢といふ。後漢の末は、世乱れに乱れて、英雄、四方におこり、おのゝ、一方に割據したりしが、つひに、いはゆる三國の世となり、蜀の劉備、魏の曹操、吳の孫權の三人、たがひに、勝敗を争ふにいたれり。この三人は、いづれも、當代の英傑なれども、智徳かねそなはり、よく、下を率ゐたるものは劉備なり。されば、その下には、忠臣、義士多く、みな、まごころをつくして、これを助けたり。そのうち、諸葛孔明は、もともあらはる。

孔明は、はじめ、乱を避けて、山野にかくれ、田畝を耕して、その日を送りたりしが、劉備、これを迎へんとて、風雪をお

かして、その寓居をたづぬること三度に及びければ、つひに出でて、仕へたり。劉備あるとき、われに、孔明あるは、なほ、魚に、水あるがごとし。といへり。その孔明を信じたることの深きを知るべし。

その後、孔明は、劉備にすゝめて、吳と和して、魏にあたり、蜀漢中などの土地を領して、つひに、帝位に即かした。りしが、帝の崩じたる後は、また、その遺詔を奉じて、幼主劉禪を助け、身ををふるまで、一度も、敵國の侮を受けしめざりき。

かつて、魏の將、司馬仲達と對陣し、しきりに、戦をいどめども、仲達、恐れて、つひに、戦はず。孔明、すなはち、婦人の服

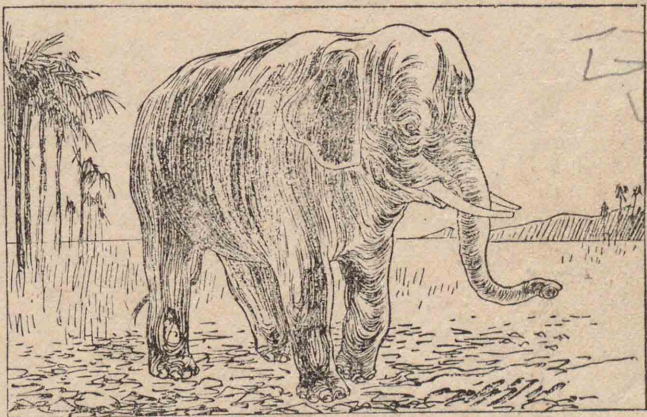
をおくりて、その卑怯なることを嘲りたり。その使者仲達の軍に到りしとき、仲達孔明の起居を問ふ。使者答へていふ。諸葛公、朝は早く起き、夜は遅くいねて、したしく、事をとりたまふ。しかも、食ひたまふところは、一日、三四碗にすぎず。仲達喜んでいふ。孔明の命も久しからざるべし。いまだ、幾日もへざるに、孔明はたして死せり。蜀の軍、その棺を護りて、國に歸る。仲達これを追ふ。蜀の軍、すこしもさわがず、たちまち、旗を反し、鼓をならして、これに向ふ。その旗鼓、すこしもみだれず。仲達、大いに驚き、孔明は、いまだ死せざりけり。とて、軍を率ゐて逃げ去れり。時の人、諺を作りて、死にたる孔明、生きたる仲達を走らす。といへり。

孔明の、幼主、劉禪に奉りたる書に、出師の表といふものあり。句々、まごころより出でたるものにして、讀むものをして、感涙にむせばしむ。されば、古より、「出師の表を讀みて、泣かざるものは、かならず不忠なり。」といへり。

第十課 象

象ハ、陸上ニスム動物中、モトモ肥大ナルモノナリ。イン
ド、アフリカナドノ熱帶地方ニ、多ク産ス。ソノ高サハ、七
八尺ヨリ、一丈餘ニオヨビ、長サハ、一丈二三尺ヨリ、一丈
七八尺ニオヨブ。マタ、重サハ、ジツニ、千貫目以上ニオヨ
ブモノアリトイフ。

象ノ皮膚ハ灰白色ニシテ、目ハ、ワ
 リアヒニ小サク、耳ハヒラタクシ
 テ、大ナリ。鼻ハ、ハナハダ長クシテ、
 前方ニタレ、屈曲自在ニシテ、奇異
 ナル形ヲナセリ。象ハ頸ハナハダ
 短クシテ、口ヲ地上ニ達セシムル
 コトアタハザルガユエニ、食物ハ、
 鼻ノ先ニテツカミテ、鼻ヲ曲ゲテ、
 口ニ投グ入レ、水ハ、鼻ノ孔ニ吸ヒ入
 レテ、口ニ吹キ入ル
 ルナリ。鼻ハ、マダ、感覺ハナハダ鋭
 クシテ、ヨク、コマカキ
 モノヲモサガシテ、コレヲ拾ヒ、力ハ
 ナハダ強クシテ、ヨ



ク、木ヲコギ倒シ、重キモノヲモ、捲
 キテ運ブ。上顎ニハ、大
 ナル、二本ノ牙アリテ、長サ、六七尺
 ヨリ、一丈餘ニオヨブ
 モノアリ。

象ハ、ツネニ、群ヲナシテスメリ。群
 ゴトニ、カナラズソノ
 長アリ。長ハ、ソノウチニテ、年長
 ケタル象ナリ。他ニ出デ
 ントスル時ハ、長、先ニ立チ、ソノ
 ホカハ、スベテ、後ニ附キ
 隨ヒ、弱キ象ヲバ、中ホドニ置キテ
 行ク。コレ、敵ノ攻メ來
 ルヲ防ガントテ、カネテ用意スルナ
 リ。マダ、日中ニハ、暑
 サヲ避ケンガタメニ、深林中ニ遊ビ、
 アルヒハ、池、河ナド
 ノ水中ニ浴シ、夜、涼シクナレバ、
 所々ヲ歩ミマハル。
 象ハソノ四肢肥大ナレドモ、走ルコ
 ト速カニシテ、ヨク、

一時間ニ、五六里ヲ走ル。マタ、ソノ鼻ヲフルヒ、牙ヲ怒ラ
ストキハ、虎ナドノゴトキ猛獸モ、ヨーイニ、ソノ勢ニ敵
スルコトアタハズトイフ。サレド、象ハ、オホムネ、木ノ葉、
果實、穀物ナドヲ食ヒテ、虎ナドノゴトク、他ノ動物ヲ捕
ヘ食フコトナシ。性質、キハメテ温順ニシテ、ヨク、人ニ馴
レ、婦女子モ、ヨク、コレヲオヒ使フコトヲ得。インドノ土
人ハ、深林、マタハ、原野ヨリ捕ヘ來リテ、コレヲ飼ヒ、耕作
運搬ナドノ勞ヲ助ケシムルコト、ホトンド、ワレヲノ牛
馬ヲ使フニ異ナラズトイフ。

象ノ牙ハソノ質堅ク、彈力アリテ、美シキ光澤アリ。サレ
バ、種々ノ細工物ヲ作ルニ用フ。マタ、象ノ皮ハ、象皮トイ
ヒテ、靴ナドヲ製スルニ用フ。

第十一課 象狩の話

いんどの東南の方に、せいろんといふ、わが九州の二倍
ほどある、大きな島がある。そこには、所々に、深林があつて、
象が多くすんでゐる。土人はそれを捕へるに、よほどお
もしろい方法を用ゐる。

まづ、象の居る深林を撰んで、その近所の立木を、そのま
ま、柱にして、一つの柵をこしらへる。それは、よほど大き
くて、時としては、周圍が數まいるにもわたることがあ
る。柵の一方には、ただ一つの入口をあけておく。それは、
狩り出された象の群が、その柵の中に逃げこむよゝに

しかけたのである。

柵が、すかりできあがると、多くの土人は、てんでに、たいまつをふりながら、象の群を遠巻にして、だんくと、柵の方へ狩りたてる。象の群は、たいまつかの光を見て、驚いて逃げ出す。そして、だんく、柵に近づいて来ると、棒や槍やりを持ってゐる土人が、いせいに、ときの聲をあげて、その棒で、そこらをたゝいたり、槍をふたりする。そこで、象の群は、ますます驚いて、うろたへて、「どこにか、逃口はないか。」とさがしまはる。すると、柵の間に、一所、隙間すきまがあるのて、象の群は、「よい逃口だ。」と思つて、恐ろしい勢で、みな、その中なかにかけこむ。この逃口と思つたのは、土人が、かねてあけ

ておいた柵の入口である。象の群が、みなかけこむと、土人は、その入口を閉ぢる。象は、まんまと、土人の謀はかりごとにかかたのである。

土人は、これから、この柵さきに閉ぢこめた象を、一匹づつ、外へ誘ひ出すのであるが、それには、四五匹の馴れた象を、をとりとりに使ふのである。その象は、土人が、かつて、これと同じ方法で捕へて、よく飼ひ馴しておいたものである。さて、馴れた象が柵の中の象を、一匹誘ひ出すと、土人は、すぐに、入口を閉ぢる。誘ひ出された象は、「逃げよう。」と思つてあれだす。馴れた象は、四方から、それをとり巻いて、その長い鼻で、その象のからだを、軽くたゝいて、いろく

と慰める。それで、その象は、だんくしづかになって、いっしに歩くよーになる。馴れた象はそれを、大きな木の下までつれて行く。そのとき、土人はあとをつけてきて、じぶな縄を象の足に投げかけて、その木に、固くくっつけてしまふ。馴れた象は、また、柵の中にある、他の象を誘ひに行く。くっられた象は、これを見て、「いっしに行かう。」と、思つて、しきりにあせる。けれども、行くことができないので、大聲にうなで、くっつけた、大きな木も根こぎにされるか。」と思はれるまでにあれさわぐ。

そのとき、土人は、象の好きな椰子や木の葉などを持って来て、食はさうとする。象は、はじめのうちには、それをね

飛ばしたり、ふみにじったりして、なかく、食はうともしないが、はらのへてくるのには、こらへることができないうで、そこらにちらばてゐるものを、一つ食ひ、二つ食ひ、つひには、土人の、さらに持て来るものまでも、喜んで食ふよーになる。

かうして、四五日もたつうちには、象は、だんく、おとなしくなつてきて、飼主の命令に従つて、いろく仕事をするよーになり、また、をとりの役をもつとめるよーになるのである。

第十二課 はわい出稼人の手紙。

拜啓。出發の際は、わざわざ、御見送りくだされ、

ありがたく存じたてまつり候。海上、何の障もなく、さる二十日到着いたし候間、御安心くだされ度候。はじめ、數日の間は、諸方を見物いたし、その後、當ほのるるにおいて、製糖業に従事いたしをり候。

さて、はわいは、御承知のごとく、日本の東、およそ三千四百まいるの海上に御座候て、十二の群島より成り立ち、面積は、全體にて、わが四國ほどに御座候。もとは、一獨立國に候ひしが、數年前、あめりか合衆國の一部とあひなり候。ほのるるは、おあふと申す島にある、はわい第一

の都會に御座候。市街の整へることゝいひ、學校、博物館、公園などの備はれることゝいひ、西洋の都會にも劣らざるよしに御座候。こゝには、本邦人の商店多く、ことに、中央には、本邦人のたてたる、日本商會の壯大なる建物もこれあり候。

はわいの人口は、およそ十五萬人ほどこれあり、その二割ほどは、土人にて、他は、みな、外國人に御座候。外國人のうち、本邦人は六萬人あまりにて、他の外國人全體と匹敵するほどの多人數に御座候。本邦人の多くは、勞働者にて、お

もに製糖會社などに傭はれて、さとりきびの栽培製糖などに従事いたし居候。日給は一圓以上に御座候へば、本國に居たる時よりは、收入はるかに多く御座候。したがて、巨額の貯蓄をなせるもの、多くありとのことに御座候。衣食住の有様は、あまり、本國と相違いたし居らず候。また、本邦人の醫業などをいとなめるものも、多く御座候へば、かく遠き所にありても、さらに、心細きこともこれなく、また、本國にあるがごとき心地いたし候。當地は熱帶地方に候へば、よほど暑かるべし

と思ひ居候ところ、四面みな、海に圍まれをり候へば、海風、つねに吹き來りて、思ひ居たるほどにはこれなく、氣候の變化少くて、よほど暮し易き方に御座候。まづは、安着の御報知、かたがた、當地の模様、あらまし申し上げ候。敬具。

七月六日

佐藤徳藏

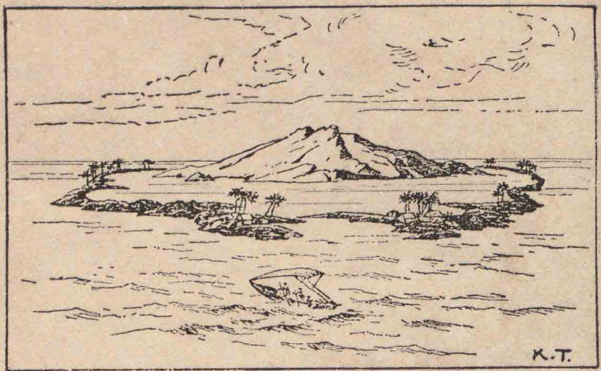
叔父上様

第十三課 珊瑚

婦人の根掛簪の珠などに用ふる珊瑚は、もと、海底にありしものにして、珊瑚虫といふ動物の造りたるものな

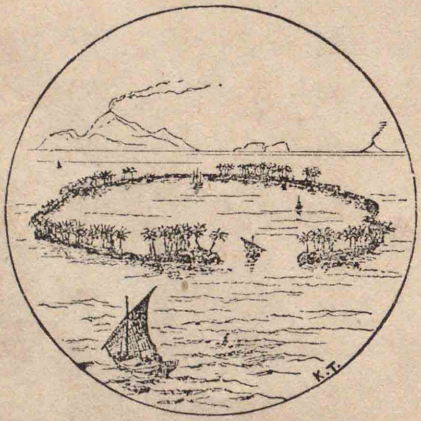
り。珊瑚虫は、きはめて微小なる動物にして、百四五十尺までの海底に、幾千萬となく群生し、つねに、水中より、石灰質を吸収し、ふたゝび、これを分泌して、堅き骨質の殻を作る。かくて、その殻、しだいに積み重りて、ついには、木の枝のごときものとなるにいたる。その色は紅色、または、白色にして、海上の穩なる日、これを透し見れば、美しきこと言はんかたなし。

珊瑚虫は、また、岩礁、または、島などの周圍を選びて、これと同じ方法にて、珊瑚礁を造ることあり。珊瑚礁は多く海中に隠るゝものなれども、中には、干汐のときに、その一部の海上にあらはるゝものあり。また、つねに、海上に



あらはれたるもあり。つねに、海上にあらはれたるものは、その形によりて、二種の別あり。一は、島の周圍、または、大陸に沿ひて、牆壁を繞らしたるがごときものにして、これを牆壁礁といひ、一は、海中に、環のごとき形して、中に、

海水をたゝへたるものにして、これを環礁といふ。牆壁礁の長さものは千まいる以上にわたり、環礁



の大なるものは直径四五十まいる以上に達す。そもく、珊瑚虫は、海水中に生活して、殻を造るものなれば、珊瑚礁の海面にあらはるゝことはなきはずなるに、かくあらはれたるものゝあるは、またく、海洋の力によれるなり。すなはち、海洋の大波、珊瑚礁の外部を打ち砕きて、これを、その上にうち上ぐるがゆゑに、その碎片、やうやく積み重りて、つひに、海面にあらはるゝにいたれるなり。

かくて、海面にあらはれたる部分は、多くの年月をふるにしたがひ、水、空氣などの作用によりて、しだいに、その性質を變じて、土となれば、他の陸地より漂ひ來れる椰子樹などの種子、こゝに附着して、成長するにいたる。太平洋、または、いんど洋の、熱帯に屬する海洋を航すると、海洋中の牆壁、または、環のごとき形せる島に、椰子樹などの生ひ茂れるものあるを見るは、おほむねこれなり。その風景は、なほだ美しくして、じつに、航海中の一奇觀なり。

第十四課 に、いとん。

に、いとんは、今より二百六十餘年前、いぎりすに生れたる理學の大家なり。幼き時は、身體はなほだ虚弱にして、成長もおぼつかなきほどなりしが、母と祖母との綿密なる注意によりて、やうやく成長することを得たり。

にーとんは、七歳の時はじめて、學校に入りたりしが、はじめのほどは、はなはだ怠惰にして、成績、つねにあしかりき。されど、後、さるところありて、大いに奮發し、つひには、級中の首席を占むるにいたれりといふ。かくて、遊ぶときにも、つねに、小さき機械仕掛の玩弄物を作ることを何よりの樂としたり。すなはち、ある時は、水時計、日時計を作り、ある時は、はつか鼠をして廻轉せしむる粉磨車を作り、ある時は、車上の人の力にて運轉する器械車などを作りたりしが、いづれも、おもしろき工夫をこらしたるものなりき。

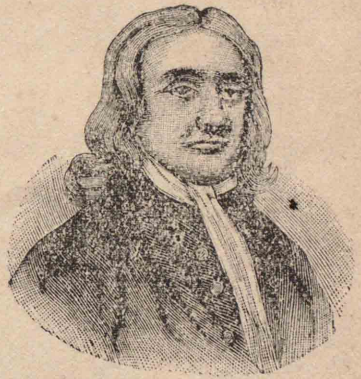
にーとんの十五歳の時、母はにーとんをして退學せしめて、所有の田地を耕作せしめたり。されど、にーとんはその心耕作の業に向はざりければ、ひまだにあれば、芝生によこたはりて、書を読み、しづかに、種々の問題を研究したり。叔父なる人、そのさまを見て、つひに、母に説きて、ふたゝび、學校に入れしめたり。

にーとんは、大いに喜び、ますます、勉強して、進んで、大學に入りしが、數學は、そのも、とも得意とするところなりきといふ。二十三歳のとき、大學を卒業せしが、その後、なほ、研究に餘念なかりしかば、つひに、種々の、理學上の發見をなすにいたれり。そのうち、も、とも有名なるは、引力の法則を發見したることなり。

これよりさき、に、いとんは、つねに、「何故に、月、地球などは、すべて、一直線には進まずして、月は地球の周囲を廻轉かへんし、月、地球は太陽の周囲を廻轉するものならん。」と疑ひゐたり。ある日、庭にありて、つねのごとく、種々の問題を研究しゐたるに、たまく、一つの林檎りんご、風なきに、地上に落ちたり。に、いとんは、これを見て、「かく、林檎の落つるは、地球に、これを引く力あればなり。」と考へたり。されど、この考は、新しきものにはあらずして、すでに、他の學者の考へたるものなりしが、に、いとんは、さらに、一步を進めて、

「今、もし、この、地球の引く力が林檎を引くのみならず、すべて、高く、空中にかゝれる物體をも引くものならば、同様に、月をも引かざるべからず。したがて、月は、一直線に進まんとすれども、この、地球の引く力のさゝふるがために、かく、地球の周囲を廻轉するものなるべし。また、月、地球などの太陽の周囲を廻轉するは、太陽に、い、そ、一強き引く力ありて、これをさゝふるがためなるべし。」

と考へたり。かくて、この理を正しとは思ひたれども、よいに、これを證明することあたはざりしが、その後、十六年を経て、その得意とせる數學によりて、精密せいみつなる計算をこゝろみ、つひに、その理の正しきことを證明する



るんどんにて死にたり。

第十五課 獅子。

獅子ハ、アフリカ、アラビヤ、インドナドノ熱帶地方ニ産スル猛獸ナリ。昔ヨリ、獸類ノ王ト稱セラル。

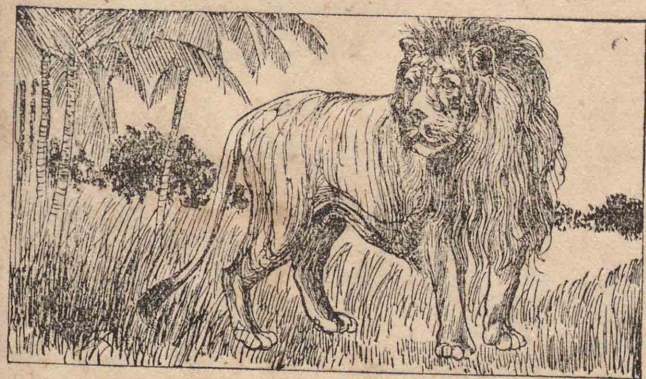
獅子ハ、身長七尺ニ及ブモノアリ。頭、ワリアヒニ大キクシテ、胸張リ、腹細シ。ソノ長シタルモノハ毛色、オホムネ

黄褐色ナレドモ、幼稚ナルモノハ、體ニ、薄黒キスデ、マダハ、斑紋アリ。

獅子ハ、容貌、ハナハダタクマシクシテ、眼ハ、圓大ニシテ鋭ク、耳ハ、直立シテ、前方ニ出デタリ。コトニ、牡ニハ、鬣アリテ、ソノ容貌ニ、イッソーノ威嚴ヲ加ヘタリ。鬣ノ毛ハ長クシテ、ヤ、黒色ヲオビ、頭ノアタリヨリ頸ノアタリニカケテ、フサク、ト群生セリ。マダ、尾ノ端ニモ、長キ毛集リ生ジテフサヲナセリ。獅子ハ、猫屬ノ獸ニシテ、虎トソノ類ヲ同ジクシ、身體ノ構造モ、マダ、アヒ似タリ。

獅子ハ、オモニ、沙原ノ藪、岩窟ノ中ナドニスミ、夜出デテ、

食ヲ求ムルヲツネトス。ソノ食ヲ求ムルトキハ、川、マダ
 ハ、泉ニ近キ草叢ノ間ナドニ、身ヲ伏セテ、他ノ獸類ノ水
 ヲ飲ミ、草ヲ食ハントテ來ルヲ待ツ。カクテ、獸類ノ來リ
 近ヅクヲ見レバ、ダチマチ飛ビカ、
 リテ、コレヲ捕フ。サレド、モシ、誤リテ、
 捕フルコトヲ得ザレバ、サラニ、身ヲ
 伏セテ、他ノ獸類ノ來ルヲ待ツナリ。
 獅子ノ捕フル獸類ハ、オホムネ、牛、鹿
 ノゴトキ草食ヲナスモノナレドモ、
 人里近クスメルモノハ、家畜ハモト
 ヨリ、人ヲモ害スルコトナキニアラ



ズ。サレド、獅子ハ、食ニ餓エタルトキ、マダハ、攻撃ヲ受ケ
 タルトキナドニアラザレバ、ミダリニ、人ヲ害スルコト
 ナシ。

獅子ハ、力ハナハダ強クシテ、牛ノゴトキ、大ナル獸類ヲ
 モ、口ニクハヘタルマ、ニテ、遠キ所ニ運ビ去リ、マダ、溝
 牆ナドヲモ飛ビコユルコトアリ。マダ、ソノ歩ムコト、ツ
 ネハシヅカナレドモ、走ルトキハハヤクシテ、馬ニモ劣
 ラズトイフ。

獅子ハ、多ク、夜間ニ吼ユ。ソノ響、アタカモ、遠雷ノゴトク、
 萬獸聞キテ、オソレ伏ストイフ。マダ、シバノ、群ヲナシ
 テ、アヒ和シテ吼ユルコトアリ。モシ、他ノ群ト會スルコ

トアレバ、マス／＼高く吼エテ、タガヒニ、優劣ヲ争フト
イフ。

獅子ハ、カ、ル猛獸ナレドモ、ソノ子ヲ愛スルコト、キハ
メテ深ク、生後、オヨソ三年ノ間ハ、ツネニ、ソノソバニオ
キテ、コレヲ養育ストイフ。

第十六課 母の愛。

「獅子は、檻より逃げ出たり。

鐵のくさりを引き切て。

こちらへ來るぞ。かまるなよ。

あぶなし。逃げよ。」と叫ぶ聲。

聲を聞くよりをのゝきて、

誰も、わが家にかげこみぬ。

街は、たちまちしづまりて、

人影もなくなりけり。」

こゝに、一人の幼子は

母の手許をたちはなれ、

井のほとりに居たりしが、

遊のわざの樂しさに、

心奪はれ、「逃げよ。」との

聲も、耳には入らざりき。

されど、あはれや、誰一人、

行きて助くるものもなし。」

獅子はたけりにたけりつゝ、

狂ひまはりて吼ゆる聲、

いよく近くなりたれど、

なほ、幼子は餘念なし。

つひに來りぬ。そのそばに、

眼はもゆる火のごとく、

爪は劔をとぎたてゝ、

ただ、一口と飛びかゝる。」

このとき、髪をふりみだし、

走り出てたる一婦人。

見るより、誰も叫びたり。

「あぶなし。止めよ。ひきかへせ。

行きなば、獅子の餌となるぞ。

あゝ。不運なる子の母よ。

行くとも、もはや救はれじ。

行かば、二人が殺されん。」

婦人は、耳にも入れずして、

怒れる獅子に飛びつきぬ。

すてにくはへし幼子を、

獅子の口より奪ひとる。

獅子は驚く、そのひまに、

その子は、無事に救はれぬ。

かくて、疵だになかりしは、

母の慈愛にほかならず。」

この有様を見し人は、

老いたる、若き、おしなべて、

母の慈愛の一念を

強きものぞと、感じけり。

今までふるひをのゝきし、

他の子の母もいひけるは、

「われも、わが子のためならば、

いかで、命を惜まん。」と。」

第十七課 皮膚の養生。

われくの身體のそとかはを包んでをる皮膚は、その内部にある種々のものを保護するものであるが、また、そのほかにも種々の作用をするものである。すなはち、皮膚はその表面にある、多くの、小さい孔からは、汗を出して、體温をほどよくし、血液を清潔にし、毛孔からは、脂を出し、皮膚をなめらかにして、少々のことでは、傷を受けることのないようにするものである。また、肺臓のよりに、いくらか、呼吸もするのである。ところが、皮膚は、たえず、こまかに剝げたり、また、汗や脂のかすが残り、汗や脂に、空氣中のちり、ほこりなどがついたりするので、皮膚には、たえず、垢ができる。

垢^{あか}がでけると、汗の出る孔^{あな}や、毛孔^{あひら}がふさがてしまひな
どして、皮膚^{かわ}は、じ^じふんに、その作用をすることができ
ないよゝになる。そればかりではなく、からだに、寒氣^{さむか}が
してきて、いやなこゝろもちがするよゝなこともある。そ
にきびやできものなどができるよゝなこともある。そ
れだから、皮膚^{かわ}は、つねに、清潔にしておかなければなら
ない。

皮膚^{かわ}を清潔にするには、ときどき、湯にはいり、し^しぼんを
使^{つか}つて、垢^{あか}を、きれいに洗ひ落すのが、いちばんよい。また、朝
起きた時などに、冷水に浸した手拭で、よく、皮膚^{かわ}を拭^{ぬぐ}つて、
そのあとを、乾いた手拭で、すこし赤くなるまでこする

のもよい。さうすると、皮膚^{かわ}が清潔になるばかりではな
く、また、たいそゝ強くなつて、少々のことでは、かぜをひか
ないよゝになる。また、皮膚^{かわ}は、體温をほどよくするもの
であるけれども、その作用には、限があるから、われゝゝ
は着物を着てをるのであるが、それも、よごれてをるも
のでは、かへつて、皮膚^{かわ}の作用を妨げるから、つねに、洗濯し
たものを着るよゝにしなければならぬ。

第十八課 し^しぼん。

「國の文明の度は、その國にて使用するし^しぼんのたかに
よりて、はかることを得べし。」と言ひたる人あり。まことに、
國、いよゝゝ開けて、國民の衛生を重んずる念、しだい

に強くなり、工業、ますます、隆盛となるにしたがひて、しぼんを使用することの、ぜんじ多きにいたるは、當然のこと、いふべし。

わが國にては、維新前は、その需要、きはめて少くして、わづかに、醫師の治療用に供するのみなりしが、維新後は、その需要、年々多くなりて、すでに、今日は、いかなる山間僻地の人にも使用せられざることなきにいたり、したがって、その製造業も、大いに盛なるにいたれり。

しぼんは、その使用せらるゝみちによりて、洗濯用しぼん、化粧用しぼん、醫療用しぼんなどに區別せらるれども、その性質の上よりいへば、そーだしぼん、かりしぼん

の二種あるのみなり。そーだしぼんは皮膚の垢を落とし、衣服を洗濯することなどに用ひ、かりしぼんは羅紗、毛布、または、工場の機械を洗濯することなどに用ふ。

そーだしぼんを製するには、まづ、牛豚の脂と椰子油などとを、ほどよく混和して、大なる鍋に入れ、火にかけて融解せしめ、これに苛性そーだの溶液を加へて、かきまぜながら煮立つべし。かくて、これに塩水を加ふるときは、あまたの泡粒、その表面に浮び來る。この泡粒をすくひとりて、他の鍋に入れ、さらに煮立て、少しく、この水分を去り、組箱に入れて固まらしめ、これを切りて、日光に乾かす。かくて乾きたるものは、すなはちそーだし

ぼんなり。そーだしぼんの表面に、紋章などのあるは、乾かしたる後、かたに入れてうち出したるなり。また、組箱に入れて固まらしむるにさきだちて、これに種々の香料と染料とを加ふれば、そのあぶらくさきを去り、美しき色をつくることを得。しぼんは、一箇數錢のものより、數圓のものまであれども、しぼんとしての價値には、さまで、差異あるにあらずして、多くは、それに加へたる香料の良否によりて、かく、價に高低あるなり。かりしぼんは、種油、麻實油、魚油などに苛性かりを加へて製す。これを製する方法は、大略、そーだしぼんに同じ。また、醫療用しぼんは、そーだしぼんなれども、その目的

により、種々の消毒劑を加へて製するなり。

第十九課

ウラヂオストック。

ウラヂオストックハアジヤロシヤ第一ノ要港ニシテ、ワガ敦賀ヲ去ルコト、北方、五百海里バカリノ所ニアリ。モト、清國ニ屬スル一漁村ニスギザリシガ、今ヨリ、四十餘年前、ロシヤコレヲ領シテヨリ、熱心ニ種々ノ計畫ヲ立テ、交通ノ便ヲハカリ、商工業ノ隆盛ト、兵備ノ完成トニツトメタリシカバ、ツヒニ、今日ノゴトキ繁榮ヲ來スニイタレリ。

港内ハ、ハナハダ廣クシテ、水深ケレバ、多クノ船艦ヲ入ルベシ。コトニ、三方、ミナ、連山ニテ圍マレタレバ、風波ヲ

避クルニヨシ。市街ハワガ國ノ神戸市ニ似テ、連山、近ク、海岸ニ迫リ、街路ノ高低一樣ナラズシテ、家屋、アルヒハ、高ク、岡ノ上ニタテ、アルヒハ、低ク、ソノ麓ニツラナレリ。サレド、市内ハ、商店軒ヲ並べ、諸官衙、兵營、學校ナド、所々ニ散在シテ、ハナハダ繁榮セリ。

コノ港ハ、ロシヤノ東洋第一ノ大軍港ニシテ、マダ、第一ノ開港場ナリ。サレバ、鎮守府、造船所、砲臺ナド、コトゴトク、コ、ニ設ケラレ、東洋艦隊、義勇艦隊、ミナ、コ、ヲ根據地トセリ。マダ、近來、コノ港ヨリ、滿洲ヲ横切り、アジャロシヤヲ貫キテ、ペテルブルグニ達スル鐵道ヲ布設シタレバ、ヨーロッパトアジャトノ交通、ハナハダ便利トナリ

テ、東西ノ貨物ノ集散地トナルニイダレリ。

コノ地ハ、カク重要ナル港ナレドモ、北方ノ海ヨリ來ル寒流ト、寒キ西北風トノタメニ、寒氣、ハナハダ烈シケレバ、毎年、一月ゴロヨリ、四月ゴロマデノ間ハ、港内ノ海水、一面ニコホリテ、ソノ厚サ二三尺ニ及ビ、マダク、船艦ノ出入ヲ絶ツニイタル。サレバ、コノ間ハ、コノ地ノ貿易、ホトンド中止ストイフ。

現今、ワガ國人ノ、コノ地ニ居留スルモノ多ク、コトニ、ワガ國ノ定期船ノ往復モアリテ、ワガ國トノ貿易、年々、隆盛ニオモムケリ。

第二十課 べてろ大帝。

今から二百年ばかり前には、ろしやといふ國のあることを知らんものが、同じよーるばにさへ、よほど多かたといふことである。しかしたまには、他のよーるば諸國のもので、その國の都もそこへ行くものもあつたが、いづれもみな、その人情、風俗、習慣などが、あまりに、本國と違つてゐるのに、大いに驚いたといふことである。まことに、當時のろしやは學問、技術も、いこゝ進まず、制度、軍備なども、とんと整はん國であつた。

しかるに、そのころ、非常なほねをりて、たちまち、その國の文明を進め、勢力を擴張して、他のよーるば諸國にも、あまり劣らんよーにした、一人の偉人がある。その偉人



は、すなはちべてろ大帝である。べてろ大帝は、子どもの時から、はなはだ賢明な人で、からだも、ごく強壯な人であつたが、四歳の時、父に死に別れた後は、うちわもめの絶え間がなくて、ずいぶん、辛苦をつくした人である。その帝位に即したのは十歳の時、政事を取りはじめたのは十七歳の時であるが、早くから、國の文明を進めたいものだ。と思つて、學識あり、才藝ある外國人から、學問、技術や外國の制度などについて、教を受けてゐた。大帝が政事を取りはじめてから數年の後、大帝は南方

のとること戦て、あぞふ海岸の一部を領地にした。そこで、「大いに海運を盛にしよう。」と思たが、このころ、ろしやでは、まだ造船術が、いこい進んでをらなんだので、大帝は、じぶんで、それを研究してみようと決心し、政事を臣下にまかせておいて、はるばる、他のよーろ、ば諸國へ微行した。

當時、造船術にかけては、おらんだといぎりすとが進んでをたから、大帝は、まづ、おらんだに行て、尊い身をもかへりみず、ある造船所の職工となり、他の、多くの職工とともに、板を割ること（せき）、檣（かじ）をけづることから、金具をこしらへること、綱（なわ）をなふことなどまで、少しも厭ふことな

く働いて、熱心に、造船術を研究した。それから、いぎりすにわたって、所々の造船所や、工場などを視察し、おーすとりやをもまはって、國に歸た。

大帝は、國に歸てから、ただちに、改革にとりかかて、國の進歩をはかるとともに、ますく、その版圖（はんず）をひろめようと企てた。

このころ、すえーでんは、よーろ、ばの一大強國であたが、その王が、まだ幼少であるのにつけこんで、ぼーらんと王とでんまるく王とが同盟して、その國を奪ひ取らうと企て、をた。そこで、大帝も、また、この同盟に加はて、長い間、すえーでんと戦て、つひに、はると海に沿てをる、廣

い土地を得た。今の首府、ペテロぶるぐは、この戦争中に、もすこーから移したものである。

大帝は、すえーでんにうち勝った後、おらんだ、ふらんす、どいつなどを旅行してきて、國の風俗を改良し、商工業を奨励し、制度を改革し、學校を設け、外國の書物を翻譯するなど、ますます、國の進歩をはかった。

大帝は、五十三歳でなくなったが、死ぬるときまで、一日も、その國の文明を進め、勢力を擴張することを忘れな

だ。
現今、ろしやは世界の一大強國であつて、その版圖はよーろばとあじやとにわたり、地球上の全陸地のおよそ六

分の一を占めてをるが、これは、その後の皇帝が、みな、ペテロ大帝の志をついで、忍耐と勇氣とをもつて、その國の勢力の擴張につとめた結果である。

をはり。

大馬鹿

明治三十六年十一月二日 文部省印刷
明治三十六年十一月三日 文部省發行
著作權所有 著者

增田朝市
文部省



明治三十七年二月五日 翻刻印刷
明治三十七年二月十日 翻刻發行
明治三十八年一月廿日 再版發行

高等小學讀本卷五

定價金八錢

翻刻發行者 早 速 勝 三

廣島市大手町二丁目五十九番邸

大阪市東區唐物町四丁目八十番屋敷

印刷者 教育圖書合資會社

代表者 濱本伊三郎

明治三十七年二月十日
文部省檢査濟濟

發行所 大阪市東區唐物町四丁目八十番屋敷
教育圖書合資會社

